

『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿

—— 第六帖（11） 酢漿草（苔） ——

本稿は、『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿——第六帖（9） 芹（青葛）——（『社会科学』第四十三巻第四号（通巻一〇一号）、平成二十六年二月）、『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿——第六帖（10） 朝顔（葵）——（『社会科学』第四十四巻第四号（通巻一〇五号）、平成二十七年二月）の続編として、『古今和歌六帖』 第六帖の「酢漿草」から「苔」までの題に配されている出典未詳歌、八首について注釈を施し、表現のあり方を考察したものである。これまで同様、底本には書陵部蔵桂宮本（『新編国歌大観』の底本）を用い、江戸期の流布本である寛文九年（一六六九）版本を含めた九本の本文異同を視野に入れる。凡例は、『社会科学』第四十三巻第四号に詳述しているもので、その概略を記すにとどめる。なお、巻末には、酢漿草（苔）の歌（三九五三―三九六二番）の別出歌一覧を付す。これについて凡例も、前稿を参照されたい。

凡例

- 一、底本は、宮内庁書陵部蔵桂宮本を用いる。
- 二、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は原則

福田 智子

として示さず、語の異なりのみを示すが、和歌の解釈上、重要と思われる表記の異同は、必要に応じて適宜示す。諸本とその略称は次のとおり。

- | | |
|----------------------|-------|
| ○永青文庫蔵北岡文庫本 | 略称（永） |
| ○島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本 | 略称（松） |
| ○内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本 | 略称（和） |
| ○内閣文庫蔵林羅山旧蔵本 | 略称（羅） |
| ○神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本 | 略称（林） |
| ○神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本 | 略称（宮） |
| ○田林義信氏旧蔵本 | 略称（田） |
| ○ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本 | 略称（黒） |
| ○寛文九年版本 | 略称（寛） |

- 三、和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。

注釈

三九五三（かたばみ）

【本文】

あふことのかたばみくさもつまなくに「下句欠」

【校異】○つまなくに^{本ノマ}、―やまなくに（永） つまなくに（和・羅・林・宮・田）つまなくに^本（寛）【語釈】○かたばみくさ カタバミ科の小型の多年草。茎は地を這い、庭や道ばたに生える。夏には小さな黄色い花が咲く。茎や葉は^{しゅうさん}蔎酸を含んで酸っぱく、薬効がある。ここでは「難（し）」と掛けて用いられる。

【通釈】

恋人と逢うことが「難し」（難しい）という名をもつ酢漿草も摘んでいないのに「下句欠」。

【他出】なし

【考察】

諸本下句欠。上句との続きから推して、下句は、「なぜ恋人に逢えないのか」といった内容が想定される。

「あふことの」「かた（し）」という例は、『古今集』に「忘草たねとらましを逢ふ事のいとかくかたき物としりせば」（恋五・七六五・よみ人しらず・題しらず）という歌がある。植物名に

「忘る」という語を持つことにちなんだ詠歌であるが、この点で、「難（し）」という語をもつ「かたばみくさ」を詠んだ当該歌と発想が共通すると言えよう。ただし、「かた（し）」に着目すると、この古今歌には、まだ当該歌に類する掛詞は見られない。しかし、次の『後撰集』では、「逢ふ事のかた糸ぞとはしりながら玉のをばかり何によりけん」（恋一・五五〇・これただのみこ・いとしのびたる女にあひかたらひてのち、人めにつつみて又あひがたく侍りければ）、「逢ふ事のかたふたがりて君こずは思ふ心のたがふばかりぞ」（恋四・八一五・方ふたがりとて、をとこのこざりければ）、「逢ふ事のかたのへとてぞ我はゆく身をおなじなに思ひなしつつ」（恋五・九一七・藤原ためよ・えがたう侍りける女の家のまへよりまかりけるを見て、いづこへいくぞといひいだして侍りければ）、「逢ふ事のかたみのこゑのたかければわがなくねとも人はきかなん」（雑四・一二六八・よみ人しらず・となりなりけることをかりてかへすついでに）といったように、「片糸」「方（塞がる）」「交野」「形見」という様々な語が「難（し）」と掛けて用いられている。また、古今・後撰時代の私家集にも、「あふことのかたのなみだにそでひちぬあまのたくひはむねにもゆれど」（素性集・三二）、「あふことのかたみのたねをえてしかな人はたゆともみつしのばむ」（素性集・三三）、「あふことのかたにおりゐるあしたづのすになくこゑはきこえ

やはする」(伊勢集・一六四・またかへし)、「あふことのかたみのこゑのたかからばわがなくねともひとはきかなむ」(伊勢集・一七八・ことかりたる人に)、「あふ事のかたみざりするみどりこのたたむ月にもあはじとやする」(兼盛集・一〇三)、「きみを又うつつにみめやあふ事のかたみにもらぬみづはありとも」(元良親王集・三四・このきたのかた、うせ給ひにければ、御四十九日のわざにしるかねを花ごにつくり、こがねをいれて御ず經にせられけるにそへ給ひける)など、「難(し)」を掛詞にする用例が散見される。当該歌も、下句が欠けているにせよ、これらの表現の中のひとつとして位置づけられよう。

三九五四(みくり)

【本文】

つくまえにおふるみくりの水はやみまだねもみぬに人のこひしき

【校異】なし

【語釈】○つくまえ 近江国の歌枕。琵琶湖の東北端、滋賀県米

原市朝妻筑摩(今の米原)の入江。淵は深いとされた(「考察」参照)。○みくり ミクリ科の多年草。地下茎があり、浅い水

中に生える。葉は剣状で、根ぎわから生える。茎を干して編み、簾を作るなど、日用品の材料として用いられた。「ここのあづか

りしける者の、まうけをしたれば、立てたるもの、ここのなめりと見るもの、三稜草^{みくり}すだれ、網代屏風、黒柿^{くろがき}の骨に朽葉の帷子かけたる几帳どもも、いとつきづきしきも、あはれとのみ見ゆ。」(蜻蛉日記・中巻)。「網代屏風、みくりのすだれなど、こ」とさらに昔のことをうつしたり(「枕草子」)。○ねもみぬ 「ね」は、「根」と「寝」の掛詞。「根も見ない」意に「共寝もしていない」意を掛ける。

【通釈】

筑摩江に生える三稜草は、水の流れが速いので、まだ根も見えない。そのように、まだ寝てみてもいないのに、あの人(女性)が恋しいよ。

【他出】

『歌枕名寄』巻第二十四、六三三五番

(筑磨 野江沼 神)

六帖 三稜

つくま江におふるみくりの水ふかみまだねも見ぬに人の恋しき

『伊勢物語古注釈書引用和歌』(9) 伊勢物語集注、第二百十段、五〇三番

筑摩江に生ふるみくりの水はやみまだねもみぬに人の恋ひしき
『源氏物語古注釈書引用和歌』(4) 河海抄、玉鬘、一四〇〇番

つくま江におふるみくりの水はやみまだねもみぬに人の恋しき

【考察】

三稜は、剣状の細長い葉が筑摩江の早い流れによじれてしまい、根を隠してしまう。その「根」に「寝」を掛け、「ね（根／寝）も見ぬ」という表現を用いることにより、共寝をする前の女性への深い思慕の情を詠んだ歌である。

「つくまえ」は、『一条摂政御集』の「つくまえのそこひもしらぬみくりをばあさきすちにやおもひなすらん」（六五・おほんとの、きたのかたきこえたまけるに、御かへりなしとて）、「つくまえのそこひもしらぬふちなれどあさましきにやおもひなすらん」（一三八・ひさしうおはせで、おとど）という二首の歌に「そこひもしらぬ」とあり、底知れぬ深さに着目して詠まれる。一方、前掲六五番歌にも見えるように、「みくり」は元来、「あさきすじ」（浅い水中に生えるもの）であり、当該歌の「つくまえにおふるみくり」という情景は、一見、想定しにくいように思われる。

だがそこには、筑摩御厨つくまのみくりの存在が影響しているであろう。すなわち、奈良時代以来、筑摩御厨から、帝の供御のために魚介類が調達されてきた。その「御厨」から、同音の植物「三稜」が連想されたことは想像に難くない。なお、当該歌の本文について、『古今六帖』諸本には本文異同はないが、『歌枕名寄』で

は、第三句が「水ふかみ」になっている。これは、前掲『一条摂政御集』に見えるような「つくまえ」の深いイメージに拠るものであろう。一方、『古今六帖』諸本の「水はやみ」は、浅い水中に生える三稜でも、水流の速さによって根が見えないという状況が、いかにもこの植物の性質に適っていると言えよう。

なお「つくまえ」の「みくり」を詠んだ歌が勅撰集に収められるのは、『後拾遺集』の「あふみにかありといふなるみくりくる人くるしめのつくまえのぬま」（恋一・六四四・藤原道信朝臣・をんなのもとにつかはしける）のみである。

「まだねもみ（ぬ）」という表現は、「ほととぎすよぶかきこゑをあやめぐさまだねもみぬにきくよしもがな」（応和二年内裏歌合・六・右近命婦・あすをのみまちてこよひのころななしとてまく）に一例見出すことができる。また、「ねもみ（ぬ）」ならば、東三条院の賀の屏風歌中の一首、「とこなつのはなによりこそあやめぐさねも見ぬやどをたづねてもくれ」（輔尹集・四三・五月、まらうど、女のものいりやのつまに、なでしこさきたり）や、「うちとけてねもみぬものを若草のことあり顔にむすほほらむ」（源氏物語・胡蝶・三七一・光源氏）他がある。

三九五五（みくり）

【本文】

こひすてふさやまのいけのみくりこそひけばたえすれ我やねたゆる

【校異】 ○みくりこそ―くりこそ（宮） ○ねたゆる―ねたゆか

（寛）

【語釈】 ○こひすてふ 恋をするという。「我」を修飾すると見た。「考察」参照。 ○さやまのいけ 「さやまいけ」のことか。

大阪府大阪狭山市にある、日本最古の溜池の一つ。『日本書紀』『古事記』に記事が見え、六世紀末から七世紀初頭の築造とされる。ただし、『夫木抄』一〇八三一番は河内国の他、丹後国あるいは肥後国かとし、また、『歌枕名寄』では、武蔵国に分類した上で、あるいは河内国かと注記する。いずれにせよ、歌枕として定着するには至っていないと考えられる。なお、『夫木抄』一〇七四七番では、地名を「はかまの池」とする。 ○たえすれ 動詞「たえす」（絶えてしまうようになる）の已然形。第三句の係助詞「こそ」の結び。 ○ねたゆる 「ね」は「根」と「寝」との掛詞。

【通釈】

狭山の池の三稜草は、引っ張ると根が切れてしまうだろうが、恋をしているという私は、「寝が絶える」（通って来なくなる）こ

とがあるだろうか、いや、そのようなことはない。

【他出】

『夫木和歌抄』巻第二十三雑部五、一〇七四七番

はかまのいけ、未国

題不知、六帖

読人不知

こひこもるはかまの池のみくりこそひけばね絶ゆれわれやはたゆる

『夫木和歌抄』巻第二十三雑部五、一〇八三一番

さやまのいけ、河内又丹後又肥後

同（題しらず）、六六

同（読人不知）

恋すとしてさ山の池のみくりこそひけばたえすれわれや絶えする

『歌枕名寄』巻第二十一武蔵国、五四六六番

池 或河内

六帖 稜

むさしなるさ山の池のみくりなはひけばたえすや我ぞたえする

【考察】

引っ張ると根が切れてしまう狭山の池の三稜草に対し、共寝が途絶えることは決していないという恋情を、「ね（根／寝）」の掛詞によって重ねた歌である。

初句「こひすてふ」は、どこを修飾しているのかわかりにくい。「色にいでて恋すてふ名ぞたちぬべき涙にそむる袖のこければ」(後撰集・恋一・五八〇・よみ人しらず・人につかはしける)、「こひすてふわがなはまだきたちにけり人しれずこそ思ひそめしか」(内裏歌合・天徳四年)・四〇・忠見・甘番 左)といった例では、作者自身の「名」、「我が名」を修飾していることが知れる。当該歌でも、いささか位置が離れてはいるが、結句の「我」を修飾し、恋をしているという作者の状況をいったものと見た。なお、「他出」の『夫木抄』歌二首、および『歌枕名寄』は、初句をそれぞれ「こひこもる」「恋すとて」「むさしなる」とし、当該歌の初句本文の不安定さを示している。

「さやまのいけ」は、『新編国歌大観』を検する限り、当該歌が和歌における初出である。その後は、永久四年(一一一六)成立(または披講)の『永久百首』の歌、「春ふかみさ山の池のねぬなはのくるしげもなくかはづなくなり」(一一一・仲実・蛙)まで、用例は管見に入らない。『永久百首』の歌は、水生植物「ねぬなは」を「くる(繰る)」から「苦しげ」を導くという技巧に拠っており、その点で、同じく池に生える植物「みくり」に着目し、掛詞を用いて技巧的に詠んだ当該歌に一脈通じるものがある。

十三世紀に入ると、「ふみわけしさやまはゆきにあとたえて池

のみくりはくる人もなし」(千五百番歌合・二〇五〇・季能卿・千二十六番 左)という「さやま」の「池」の「みくり」を詠んだ歌が見えるが、おそらく当該歌を念頭に詠んだものである。ただし、判詞には、「左歌、さ山をしもよめる雪には、おなじくはこしのかたをやよみ侍るべからん、さやまによせる事あらんには沙汰におよばぬ事にはべり」とあり、当時としては、「さやま」の「池」に雪のイメージを与えるのは、いささか無理があったようである。しかしその後は、藤原定家が、「氷のみ結ぶさ山の池水にみくりも春のくるをまつらし」(洞院撰政家百首・上・八一九・冬)と詠み、また、「氷りあるさやまの池のもかり舟」(下句欠) (宝治百首・二二二六・経朝・冬十首)といった歌も詠まれるなど、『千五百番歌合』歌の影響が窺える。一方、『新撰六帖』の「さやまなる池のみくりのねもみねどうちはへ人のくるぞまたるる」(第六・二二〇〇・弁入道光俊・みくり)は、『千五百番歌合』歌ではなく、当該歌を念頭に置いた作と見られる。『新撰六帖』は、『古今六帖』の題で新たに歌を詠んだものだが、題だけを『古今六帖』に倣ったのではなく、作者の光俊は、和歌をも参看していたものと推察される。

下句は、『万葉集』の「常陸なる浪逆^{なみさか}の海の玉藻こそ引けば絶えずれあどか絶えせむ」(第十四・三四一五・三三九七)に酷似している。この万葉歌は、『古今六帖』に、「ひたちなるあさかの

浦のたまもこそひけばねたゆれわれはたえせじ」(第二・一二六四・くに)という表現で収められており、当該歌の発想は、この万葉歌の系譜に連なると見られよう。

なお、「ね(根/寝)」「たゆ」という表現は、「くづれすないもせの山のやますげのねたえばかりるくともぞなる」(平中物語・第二十九段・一一一・男)、「すきものはなのあたりによせざらばこのことなつもねたえましやは」(仲文集・五・中将殿、せざいつくろはせ給ふに、心なき人の、なでしこをすきてすてたるを)といった歌に見出せる。

三九五六(よもぎ)

【本文】

我もふりよもぎもやどにしげりにしかどにおとする人はたれぞも

【校異】 ○我もふり―我も^ふり(黒) ○たれそも―誰そと(松)

【語釈】 ○ふり「ふる」は、年を取る意。 ○よもぎもやどにしげりにし いわゆる「蓬の宿」(よもぎの生い茂った宿、手入れが行き届かず、荒れてさびしい宿。あばら屋。よもぎうの宿。よもぎの住み家。)になってしまったことをいう。 ○かど 家の出入り口の門。ここでは、「蓬の門」(よもぎの生い茂って荒れている門。また、蓬で葺いた粗末な門。あるいは、貧者や隠

者の家の門。また、その家。自分の家をへりくだつてもいう。蓬門^{ほうもん}。)となった状態。

【通釈】

私も年を取り、蓬も宿に茂った門をたたいて訪ねてくる人は、いったい誰だろう。

【他出】 なし

【考察】

年老いた我が身を自覚するとともに、視界に入るのは、蓬が茂る荒れ果てた庭である。そんな世間から取り残された家の門を、意外にもたたく人がいる。「いかでかはたづねきつらん蓬ふの人もかよはぬわがやどのみち」(拾遺集・雑賀・一二〇三・よみ人しらず・題しらず)に通じる表現世界をもつ歌である。

当該歌において、年をとった「我」は、繁茂した「よもぎ」に重なり、人の晩年のイメージを形成している。「われならでまづうちはらふひともなきよもぎがはらをながめてぞふる」(扇宮女御集・四二・三条院にて)では、「われ」は「よもぎがはら」を「うちほらふ」人物であるのに対し、当該歌が、自らの年老いたという自覚と庭の荒廃によって、独居老人の孤独を詠んでいる点に注意したい。

「我」「ふる」という表現の代表的な例は、「世中にふりぬる物はつのくにのながらのはしと我となりけり」(古今集・雑上・

八九〇・よみ人しらず・題しらず」であろう。その他にも、「いたづらに世にふるものとたかさこの松も我をやとともとみるらん」（貫之集・八九七・つかさたまはらでなげくころ、大殿のかかせ給ふおおくによみてかける）、「秋はてて時雨ふりぬる我なればちることのはをなにかうらみむ」（後撰集・冬・四四八・よみ人もへしらず・題しらず）、「涙とも雨ともわかず大かたにわれはふるとぞ人を見るらん」（信明集・七九・また）などの歌が見出せる。これらの用例には、長い間、無為に生きてしまったという感慨がある。

蓬が繁茂した庭は、「蓬生 ヨモギヲ 荒留屋門丹 アレタルヤドニ 郭公鳥 ホトトギス 佗敷左右丹 ワビシキマデニ ウチハヘテナウ 打蠅手鳴」（新撰万葉集・卷之下・三二三）に見えるように、荒廃の象徴である。「人の秋にはさへあれてみちもなくよもぎしげれるやどとやは見ぬ」（平中物語・第三十六段・一三六・この女）は、「人の秋（飽き）」すなわち、人の訪問が途絶えることにより、庭の手入れをすることもなくなり、家が廃れるさまを詠む。「人もこぬよもぎのやどはつれづれとけふのあやめをあはれとぞきく」（能宣集・三七二・返事）、「おもひやるよもぎのやどはさびしくてなみだのつまになにをかくらむ」（仲文集・五五・女なくなしてなげくころ、けさうぜし人、五月五日おこせたる）、「けふしもあれよもぎのやどをとふ人はもしあやめにもならむとやおもふ」（仲文集・五六・返し）、「いかでかはたづねきつら

むよもぎふの人もかよはぬ我がやどの道」（高光集・三六・たふのみねにはべるころ、ひとのとぶらひたるかへりごとに）、「よもぎおひてあれたるやどをうぐひすの人くとなくやたれとかまたん」（大和物語・第百七十三段・二九一・女）といった歌からも、人の訪問が途絶えたさびしさが読み取れる。

「たれぞも」という表現は、「くらぶ山こずゑも見えてふる雪に夜半にこえくる人やたれぞも」（新撰和歌第二・二四八）、「ふくかぜのこころもしらではなすすきそらにむすべる人やたれぞも」（実方集・一七・清涼殿御前のすすきをむすびたるを、たれならんといひて、ないしの命婦のむすびつけさせける）、「しばきこるかまどとやまのうぐひすのこゑきさふるす人やたれぞも」（大式高遠集・三七四・家のみかしぎの、きこりにやりたりけるに、うぐひすの、すくひたりけるきの枝ありけるを、たてまつれるを見て）といった歌に見られる。当該歌は「人はたれぞも」であるが、「人やたれぞも」で用いられることが多い。

三九五七（よもぎ）

【本文】

ふるさととなるぞわびしき夏衣よもぎのうへの露みるごとに

【校異】○ふるさととーふると さと（朱）（宮） ○なるそーなる そ（朱）（宮） ○よもぎーよりき（和・羅）よりき も（朱）（宮）

【語釈】○ふるさと 以前は栄えていたが、今はさびれている土地。

○夏衣 「よもぎ」が、五月に着用する衣の襲の色目であることから、「よもぎ」に付く枕詞と見た。「夏衣」の枕詞としての用法は、「薄し」「ひとへ」「裁つ」に付くなど多岐にわたる。ただし、『新編国歌大観』を検しても、他例は見当たらない。

○よもぎ キク科の多年草。葉の香氣により邪氣を払うとされ、五月五日の端午の節句に菖蒲とともに用いられ、夏には盛んに生い繁る。和歌においては、「浅茅」や「葎」と同様に、荒廃したイメージをもち、夏の情景として詠まれる場合もあるが、「露」などの景物と組み合わせられ、秋のイメージが定着していく。あるいは、「夜も着」（夜の間も着る）を響かせるか（「考察」参照）。

【通釈】

さびれた場所になってしまったのがつらく悲しい。蓬の上に置く露（涙）を見るたびに。

【他出】なし

【考察】

蓬の上に露が置かれたびに、だんだんと荒れていく風景のわびしさを詠んだ歌である。「よもぎふに露のおきしくあきのよはひとりぬるみもそでぞぬれける」（是貞親王家歌合・三五）という歌からも知れるように、蓬の上に置く露は、秋という季節を象

徴的に示す。また、当該歌では「夏衣」を「よもぎ」に付く枕詞と見たが、夏の衣の上に露が置くイメージは、夏から秋への季節の推移を表しているよう。さらに、衣の上の「露」からは、「涙」も連想される。「語釈」で指摘したように、仮に「蓬」「夜も着」を響かせたとすれば、秋になって恋人に飽きられた女性や、まだ夏衣を着たまま、夜の間に涙にむせぶ姿も彷彿とされるであろう。「人の秋にはさへあれてみちもなくよもぎしげれるやどとやは見ぬ」（平中物語・第三十六段・一三六・この女）に通じる状況も想定し得る。

夏の「よもぎ」は、「蓬生荒屋前無友 郭公鳴陀還古棲
まさとしりをあわおくりてきゆうわんにかくへし さりとしまるあきにたれきたるなうをまん
応 相送 鳥 往 旧 館 去 留 秋 誰 待 来 夏」（新撰万葉

集・卷之下・三二四・夏歌二十二首）という漢詩に見える他、和歌においても、「かこはねどよもぎのまがきなつくればあばらのやどをおもかくしつづ」（好忠集・毎月集・一五八・六月はじめ）他に見出され、荒廃した家の庭に繁茂するものとして詠まれる。これは後にも、「わがやどのよもぎがにはは夏ふかしたれわけよとかうちもはらはん」（六百番歌合・二〇〇・隆信・夏/右勝）、「ひととはぬ庭のよもぎの跡もなく茂りにけりな夏のふかさに」（俊成卿女集・三九・夏）というように受け継がれる。

一方、秋の景物として「よもぎ」を詠んだ歌としては、前掲『是貞親王家歌合』歌が、ごく初期の例であろう。『後拾遺集』

に採られた「なけやなけよもぎがそまのきりぎりすきゆく秋はげにぞかなしき」(秋上・二七三・曾禰好忠・題不知)に至り、「よもぎ」のもつ秋の季節感は、強固なものになったと考えられる。

「ふるさと」と「よもぎ」の組み合わせは、当該歌以前には管見に入らない。これ以後には、『源氏物語』朝顔巻に、「いつのまによもぎがもとむすほれ雪ふる里と荒れし垣根ぞ」(三二三・光源氏)という歌を見出すが、用例が目立って増えるのは十二世紀である。「よもぎ分けたづねぞきぬる古郷は花たちばなのかをしるべにて」(永久百首・五五四・大進・故郷)、「ふるさととはよもぎがふるえしもたかて月ばかりこそすみもあらさね」(出観集・五六二・冬月)、「ふるさとはいはもるみづにすみかへてよもぎやにはのあるじなるらん」(寂蓮結題百首・三四・いづみなつのすみかたり)、「古郷のよもぎはやどのなになればあれ行く庭にまづしげるらん」(山家集・中・一〇二九)他の歌があり、繁茂する「よもぎ」が、荒廃した「ふるさと」を象徴的に示す表現として定着していたことがわかる。

三九五八 (よもぎ)

【本文】

秋風やよもぎのやどに吹きぬらんこゑなつかしく鳴くきりぎりす

す

【校異】 なし

【語釈】 ○よもぎのやど 蓬の生い茂った宿。荒れてさびしい宿。きりぎりすの住処でもある。 ○きりぎりす 秋に鳴く虫の一種。現在のコオロギを指す。 ○なつかしく 慕わしさ、親しみを感じるさまをいう。去年の秋と同じこおろぎの鳴き声を指している。

【通釈】

秋風が蓬の生い茂った宿に吹いたのだろうか。聞き慣れた声で鳴くこおろぎよ。

【他出】 なし

【考察】

こおろぎは、住処である蓬のもとに秋風が吹くことによって鳴き始め、人は、そのこおろぎの声によって聴覚的に秋の訪れを知る。こおろぎを擬人化しながら、虫にも人にも、毎年等しく訪れる秋の到来を詠んだ歌である。

「(秋)風」が吹くと「きりぎりす」が鳴くという歌は、早くも『万葉集』に、「秋風の寒く吹くなへ我がやどの浅茅が本に蟋蟀鳴くも」(巻十・二二六・二二五八・蟋を詠む)という例

があり、当該歌と同様の趣向が見て取れる。平安期に入っても、「秋はきぬいまやまがきのきりぎりすよなよななむ風のさむ

さに」(古今集・物名・四三二・よみ人しらず・やまがきの木)の他、「秋風にほころびぬらしふぢばかまつづりさせてふ蟋蟀なく」(古今集・誹諧歌・一〇二〇・在原むねやな・寛平御時きさいの宮の歌合のうた)、「秋風の吹きくるよひは菴草のねごとにこゑみだれけり」(後撰集・二五七・つらゆき・題しらず)など、用例は少なくない。

一方、「よもぎのやど」の「きりぎりす」は、当該歌がごく初期の例と見られ、同時代の作としては、同じ『古今六帖』の「秋かぜのややふきしけばきりぎりすうくもよもぎのやどをかるるか」(古今六帖・第六・三九九一・そせい・きりぎりす)という歌を見出すにとどまる。「よもぎ」と「きりぎりす」との組み合わせを定着させたのは、三九五七番歌「考察」でも採り上げた曾禰好忠の歌と見られ、これが『後拾遺集』に収められることにより、「蓬が杣」という表現が、独自のイメージを獲得するに至る。

「きりぎりす」の「こゑ」を「なつかし」といった歌は、『新編国歌大観』を検する限り、他例を見ない。「世の常に聞けば苦しき呼子鳥声なつかしき時にはなりぬ」(万葉集・巻八・一四五一・一四四七・大伴坂上郎女の歌一首・右の一首、天平四年三月一日に、佐保の宅にして作る)、「うぐひすのこゑなつかしくなきつるはのちもこひつつしのばなむとか」(宇多院歌合・

一六・躑躅花 右) などのように、鳥の声にいう場合が散見される。

三九六〇(こけ)

【本文】

いしのうへに生ひいづるこけのねもいらすよなよな物をおもふ比かな

【校異】 ○物を―物は(林)

【語釈】 ○いしのうへに生ひいづるこけのねもいらす 「こけ」は、湿地や岩、古木などに生える藓類、苔類、地表類、およびそれらに類似するシダ植物の通称。「いしのうへに生ひいづるこけ」は「ね(根)」を導く序詞で、「根／寝」の掛詞によって下句の文脈を作る。 ○よなよな 夜ごと。毎夜毎夜。和歌においては、恋の悩みによって、眠れない夜を重ねるさまをいうことが多い。

【通釈】

石の上に生え出た苔の根が石の中に深く入り込むこともないように、寝入ることもなく、毎夜毎夜、物思いをする頃だなあ。

【他出】 なし

【考察】

石の上の苔が根を深く張ることができないさまを「根も入ら

ず」と表現し、「寝も入らず」と掛けることによって、毎晩物思いをしうとうとすることもできず苦悩する様子に転じた歌である。

「ねもいら(ず)」という表現は、『新編国歌大観』に拠る限り、先行例は見当たらない。後の例としては、「つきもせずこひする人はねもいらでふしみの里のよこそながれ」(伊勢大輔集・一二一・ふしみの里の恋)、「波のよるいはねにたてるそなれ松まだねもいらず恋ひあかしつる」(基俊集・七四・よるのこひ)がある。とくに後者は、当該歌と同様の掛詞が用いられている点で留意しておきたい。

「よなよな」という語は、『万葉集』にはないが、勅撰集においては『古今集』から見え、「うき事を思ひつらねてかりがねのなきこそわたれ秋のよなよな」(古今集・秋上・二一三・みつね・かりのなきけるをききてよめる)、「おきあかすつゆのよなよなへにければまだきぬるともおもはざりけり」(後撰集・秋中・二八三・右大臣・又)他の用例がある。秋の夜長のイメージが強い。

「物をおもふ比かな」という表現は、「秋ののにみだれてさける花の色のちくさに物を思ふころかな」(古今集・恋二・五八三・つらゆき・題しらず)、「しもがれのあさぢがもとのかるかやのみだれてものをおもふころかな」(是則集・三〇)、「郭公鳴きの

みわたる夏山のしげくものをおもふ比かな」(兼輔集・三二・物おもひしけるころ、ほととぎすをききて)、「風吹けばいはうつなみのおのれのみくだけでものおもふころかな」(伊勢集・三八三)など、用例は散見される。物思いをしている状況を比喩的に表現している部分を受ける形になっている。

三九六二(こけ)

【本文】

あふことをいつかそのひとまつの木のこけのみだれてこふる此ごろ

【校異】○此ごろ―比哉この比イ(松) 比哉(林) ○本文欠落により切

紙を貼付して記す(黒)

【語釈】○まつ「待つ」と「松」との掛詞。○こけのみだれて

当該歌の「こけ」は、とくに松蘿しやうら(猿麻さるま棒おがせ)。地表類サルオ

ガセ科の植物。漢方薬として用いられる。)を指すか。糸状に分

岐し、樹木の幹や枝から垂れ下がって生える。この様子を「み

だれて」と表現し、恋人を慕ってあれこれと思い煩う恋心の乱

れを重ねたと見た(「考察」参照)。

【通釈】

恋人との逢瀬を、いつの日にかと待って、松の木の苔が乱れているように、心乱れて恋い慕う今日この頃だよ。

【他出】（「考察」参照）

『新勅撰和歌集』巻第十二恋歌二、七三二番

題しらず

よみびとしらず

きみにあはむその日をいつとまつの木のこけのみだれて物をこそおもへ

『源氏物語古注釈書引用和歌』（1）源氏積、浮舟、四一三番

君にあはんそのひはいつぞまつの木のこけのみだれてものをこそ思へ

（「奥入」「紫明抄」「河海抄」にも）

【考察】

「まつ」「みだれて」という語句にふたつの意を与えることで、松に生えた松蘿が雑然と垂れ下がっている様子と、恋に煩悶する心情とを重ねた歌である。

書陵部蔵御所本（五一〇・一二）『躬恒集』に、「あふことをいまやいまやとまつの木のときはに人をこひわたるかな」（三四六）という酷似した歌がある。当該歌と全く無関係に詠まれたとは考えにくい。『古今六帖』の題である「こけ」が詠み込まれていない点に注意しておきたい。なお、「他出」に掲載した『新勅撰集』他の歌も、当該歌と同じ趣向ではあるが、本文異同が少なくない。前掲の『躬恒集』には、「逢ふことをいまやいまやとまつかぜのおとにのみやはききわたりなん」（三四九）

という類想歌もあり、本文が錯綜していたことが知れる。

松に生える松蘿の平安和歌における例としては、「千とせふるまつにかかれるこけなればとしのをながくなりにつらしも」（書陵部蔵御所本（五一〇・一二）躬恒集・一三八・延喜十七年承香殿御屏風和歌／まつにかかるこけをみたる所）が挙げられよう。屏風絵の図柄としてある程度定着していたことがわかる。また、この歌は、『古今六帖』「こけ」題の冒頭に、「ときはなる松にかかれるこけみれば年のをながきしるべとぞ思ふ」（第六・三九五九）という形で採られている。

では、いわゆる「こけ」と「まつ」との組み合わせの例とは、例えば、『万葉集』に見える。「妹が名は千代に流れむ姫島の小松が末に苔生すまでに」（巻二・二二八・二三八和銅四年、歳次辛亥、河辺宮人、姫島の松原に娘子が屍を見て、悲嘆して作る歌二首）では、小松の梢に苔が生すまでという表現で、長い年月、永久の年月を象徴的に表す。平安期に入っても、同様の発想は、前掲の書陵部蔵御所本（五一〇・一二）『躬恒集』一三八番歌の他、「松もおいてまたこけむすに石清水行末とほくつかへまつらん」（貫之集・八〇六・すざく院の御かどの御時、やはたのみやにかもの祭のやうにまつりしたまはんとさだめらるるに奉る）、「こけしげみまつばらわけてゆく人はいくらのちよをみつつかぞへむ」（尊経閣文庫本元輔集・五二・右大臣の五十賀の

屏風の和歌、まつばらへゆく人」といった歌に見出せる。一方、当該歌は恋情を詠んでおり、歌の内容はこれらの歌とは一線を画す。

「みだれ」で「こふ」という表現は、『万葉集』にも、「草枕旅にし居れば刈り薦の乱れて妹に恋ひぬ日はなし」（巻十二・三一九〇・三二七六）他の歌に見られ、平安期においても、「おさへにもよらぬたまもの浪のうへにみだれてのみやこひ渡りなむ」（古今集・恋一・五三三・読人しらず・題しらず）、「しづはたにみだれてぞおもふ恋しさはたてぬきにしておれるわが身か」（貫之集・六二七）など、用例は散見される。恋に思い乱れる心を、「刈り薦」や「たまも」、「しづはた」といった「乱れ」を象徴的に表す語とともに詠むことが多い。当該歌も、それらに類する語句として「まつの木のかげ」を詠んだのであろうが、和歌表現としては定着しなかったものと推察される。

附記

本稿は、同志社大学文化情報学部における二〇一四年度春学期の授業「文献講読」において採り上げた内容の一部である。受講生のうち、松井佑磨（三九五五番）、上田果穂（三九五六番）、濱元佐和（三九六〇番）が、それぞれの担当歌についてレポートを執筆した。その後、これをもとに、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」（同志社大学人文科学

研究所第18期研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号25330403、いずれも平成25（27年度）の一環として、他の歌をも含めてさらに検討を加えた。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2.2.2に、竹田正幸氏（九州大学大学院システム情報科学研究院）作成の文字列解析器「e-GSA Ver.2.00」を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・島原図書館島原松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げる。

『古今和歌六帖』別出歌一覧 ―第六帖、3953～3962番―

かたばみ

3953 あふことのかたばみくさもつまなくに（以下欠）

〈未詳〉

みくり

3954 つくまえにおふるみくりの水はやみまたねもみぬに人のこひ

しき

〈未詳〉

3955 こひすてふさやまのいけのみくりこそひけばたえすれ我やね

たゆる

〈未詳〉

よもぎ

3956 我もふりよもぎもやどにしげりにしかどにおとする人はたれ

ぞも

〈未詳〉

3957 ふるさとなるぞわびしき夏衣よもぎのうへの露みることに

〈未詳〉

3958 秋風やよもぎのやどに吹きぬらんこゑなつかしく鳴くきりぎりす

〈未詳〉

こけ

3959 ときはなる松にかかれるこけみれば年のをながきしるべとぞ思ふ

思ふ

7-5 躬恒 138 「千とせふる」「こけなれば」「としのをながく」

「なりにけらしも」

3960

ふ比かな

〈未詳〉

3961

おくやまのいはほのこけの年ひさにみれどもあかぬ君にもあ

るかな

3-3 家持 174

3962

此ごろ

〈未詳〉

あふことをいつかそのひとまつの木のこけのみだれてこふる

わたるかな

《参考》7-5 躬恒 346 「いまやいまやと」「ときはに人を」「こひ

